

ピアジェ・ワロン論争の展開 (3)

— ワロン「行為から思考へ」における模倣形成論 —

○ 亀谷和史 (日本福祉大学) 日下正一 (福島大学) 足立自朗 (埼玉大学) 加藤義信 (愛知淑徳大学)

ピアジェ理論では、外界の対象に向かう運動的シエマの展開・組織化と、その心内化された活動としての操作の発達こそが問題であり、それらの活動の一環として模倣の発達も位置づけられていた。では、運動的水準と心的水準の機能的非連続性こそが問題であると考えたワロンは、精神発達における模倣の形成とその役割をどのように説明しようとしたのであろうか。

1、姿勢機能系と姿勢的活動への着目

ワロンは、模倣の発達を論じる際、ピアジェが見落としているもう一つの重要な運動的活動に注目する。それは、他者によって開かれ、他者との情動的＜交感＞を保証することになると同時に、他者との関わりが断たれたときには閉じた回路にもなりうる身体内・自己内に向かう活動 (= 自己塑型的活動 *activité proprioceptive*あるいは造形的活動 *activité plastique*とも呼んでいる)である。この自己塑型的活動と、外界の対象に直接作用する開かれた回路としての実践的活動 *activité pratique* (または外界作用的活動 *activité extéroceptive*とも呼んでいる)の両者を視野に入れて、2つの対立と統一の過程として模倣の形成や表象機能の発生をワロンは説明しようとする。このことを心身の諸機能の側面からみるならば、発達の初期において、ワロンは植物性機能 (内受容感覚—臓器的活動の環)と運動性機能 (外受容感覚—外界作用的活動の環)を媒介する機能系として、広義の姿勢機能 (あるいは自己形成 *proprio-plastique*機能とも呼んでいる)を重視し、この心身に関わる姿勢機能系によって生じる姿勢的活動 (*activité posturale*) = 自己塑型的活動こそが、模倣の形成や表象機能の発生に深く関わっていると考えるのである。

姿勢的活動は、緊張性の活動であり、それに伴う自己受容感覚 (*sensibilité proprioceptive*)を生み出す。この自己受容感覚は、内臓内の筋収縮=筋肉繊維の緊張に伴って生じる内受容感覚と、筋緊張 (トーン)という点で近い。姿勢的活動は、身体内の筋緊張 (トーン)とそれによって生じる自己受容感覚からなるという意味で、身体内での、身体内に向かう活動だが、一方で、身体が位置する状況に応じた活動であるという意味で、また、対象への外的運動を調整し支えている活動であるという意味で、外界に対して開いている活動でもある。しかし、自己と外界との距離を埋め、外界を造り変える活動でなく、自己と外界とに

距離をとり、自己を造り変える活動である。

それゆえにワロンの理論枠組みでは、場面への直接的適応としての運動である自動作用 *automatisme* (生得的な反射や後天的に獲得される習慣性の意識の媒介を必要としない運動を含む) から直接的場面に規定されない、ここにはない、可能的なものに対応する行動、そしてやがては意識化を伴う行動がどうして生まれるかを説明できない、と考えられている。この点が、運動的シエマの自立的展開だけから心的なものが予定調和的に発生すると説くピアジェ理論と根本において異なり対立する点である。

2、ワロンの模倣形成論

模倣の形成においては、①モデルのなかへの自己解消、モデルへの融即 (*participation*) と、②実行すべき行為とモデルの行為の二重化 (*dédoublément*) という2つの契機が必要である。

ワロンによれば、模倣の起源は、他者との情動的活動にある。誕生から3、4カ月の時期に、情動の表出と伝染を媒介として、現前する他者と類似の運動反応を生じさせる場合があるが、これはまだ模倣でない (共鳴動作やほほ笑みの交換)。

やがて外界に直接働きかける感覚運動的活動の準備状態としての姿勢的活動が分化する (待機の姿勢)。

次に、姿勢的緊張でもってモデルに対峙し、モデルの動きを知覚しつつモデルの動作に姿勢的に融即する (融け込む) 時期が訪れる。つまり外的な同型の運動反応となつてすぐには生じないが、その運動を準備する筋肉の動き、そのときの姿勢を維持する筋肉の働きが生じた状態になる。この時点で、モデルの主体からの分化と、実践的活動からの自己塑型的活動の分化という二重の分化が進行しているのである。

そしてモデルの知覚から時間において、モデルの運動が再生的に表出されるようになる。姿勢的融即によって生じた筋肉活動の印象が登録されて残り (= 孕んだ姿勢が空間的、時間的にモデルから離れて自立し)、それが既に行なわれていてこれからも行ない得る動作と再統合することによって、モデルなしの再生的表出 (= 模倣) が可能になる。この見えざる過程の進行に必要な時間をワロンは懐胎 (*gestation*) とかあつため (*incubation*) という用語で説明しようとした。

このようにワロンの模倣形成論では、今後解明を要する重要な理論的問題が示唆されているのである。